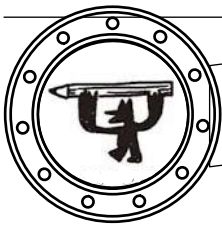


第2回京都文学レジデンシー/Kyoto Writers Residency 02

2023.09.30-10.22



いつも京都文学レジデンシーを応援くださりありがとうございます。
第2回レジデンシーのご報告をお届けします。

E-MAIL: kyotowritersresidency@gmail.com / WEBSITE: kyotowriters.org

今年度の参加作家メンバー

▶▶作家の詳しい紹介は
note@kyoto_wrでどうぞ!!



©Jolyne Vanquachhoven
Maud Joiret
モード・ジョワレ



©Hiroki Tsuboi
강망화
カン・バンファ



©野村佐紀子
佐藤文香
さとう あやか



©Dimitris Pappas
Josephine Rowe
ジョセフィン・ロウ



©Catalina Bartolomé
Luz Vítolo
ルス・ヴィトロ



OFの様子は
こちら
◀◀◀◀

10月1日香老舗 松栄堂・薫習館で、オープニング・フォーラムが開催された。「発酵する思考、表出することば」をテーマに、参加作家らが自らの創作の秘訣について、巧みな比喩を交えて語り合った。カン・バンファさんは、推敲前に原稿を「寝かせ」る過程があるという、佐藤文香さんは、俳句は素材そのものを提示する「刺身」に近いと返した。モード・ジョワレさんは、場所や時間が変われば、人の中身も代わり、言葉やストーリーへの接し方も変わるの、人間こそが「イースト菌」のような存在だと主張した。皆の話の聞いていたジョセフィン・ロウさんは、十年以上寝かせていた自分の小説は、引き出しの中で「腐って」しまっているのではないかと焦りはじめ、日本から最も遠い南米から参加したルス・ヴィトロさんは、そもそも自国に発酵食品があまりなく、創作の比喩としては、砂漠に雨が降り、雨林が育つといったメタファがよく用いられると語っていた。OFの様子は YouTube (澤西)

おうちで読もう

クロージングイベント

朗読会 @真謡会館



©Naoyuki Ogino

レジデンシー滞在の最後を締めくくるイベントである朗読会は、北大路にある能楽堂、真謡会館の能舞台にて行なわれた。2018年にリニューアルされた真謡会館には伝統文化の発信を担う神聖さが備わり、と同時に、多言語でのパフォーマンスを見守る包容力も感じられた。舞台上上がる者は一様に、白の足袋を着用する必要がある。レジデンシー参加者たちとその邦訳を朗読する人々が揃いで履く純白ソックスは、正装のムードを醸し出す。

モード・ジョワレさんが演出を統括した入念なりハーサルを経て、夕刻、会はスタートした。40名ほどの観客がライトに照らされた能舞台を見つめる

トップバッターはカン・バンファさん。日韓の翻訳者である彼女は、母語の異なる祖母と絵本についての思い出を日本語でエッセイにし、それを朗読する。学生スタッフの山田絵梨奈さんが英訳を、さらにカンさん自身による韓国語朗読が続いた。3か国語での反復が、複雑な歴史をたどった日韓関係を彷彿させる。

2番目には、ジョセフィン・ロウさんがパンデミック下の家族をめぐる幻想的な短編を落ち着いたトーンで披露。その日本語訳を杉本はなさんが読み上げる。続いて、佐藤文香さんが能舞台の右奥の扉から姿を現わした。俳人である彼女は京都での滞在中に執筆した散文詩と俳句をまずは日本語で、さらに英語で朗々と披露した。「深草を里とおぼえて秋の蝶」。俳句の韓国語訳をカンさんが読み上げ、プロジェクターで壁面に3か国語が投影されるという演出もなされた。

ルス・ヴィトロさんは、スペイン語の短篇を身振りゆたかにパフォーマンスした。暑い日差しの下、スカートの裾を翻して自転車で疾走する少女を、二人称で描き出したロマンティックな作品で、邦訳を成田さんが担当。日本語朗読は吉田恭子さんが担当した。



©Naoyuki Ogino

ラストはジョワレさん。「牝牛のいる風景」と題されたフランス語の散文詩は、コンポストという言葉の多義性から始まり、音律の面白さが際立った。小柏裕俊さんの手による邦訳は文字で壁面に投影された。

全体的に趣向が凝らされ、静から動へと変化したパフォーマンスの終わりには、一同が能楽堂の中央に集い、観客に挨拶した。いずれの顔にも充足の表情が浮かぶ。盛大な拍手とともに会は終了した。

(江南)

第2回京都文学レジデンシー・イベント報告



聞香講義

10月5日に、香老舖松栄堂の煙正高社長による聞香レクチャーが開催された。日本の自然や香りのお話を伺いながら、香席は進んでいった。銀の水差から水を注いで墨を擦って墨汁を作り、筆で自分の名前を書き、香道具が金色の打敷に見守られる。参加者は儀式に集中するように、香元の所作に銀葉が置かれ、そこに香木が置かれると、組香が始まる。「秋風」と「白菊」という二種の香りが用いられた。「秋風」の香りを記憶した後、名前を伏せた四つの香りを嗅ぎ、どちらかの名前を半紙に記す。松の木が風に揺れるさま、菊の白い花びら、波の音……情景を香りで「聞く」。正解発表は大盛り上がりだった。求めて、松栄堂の後には、レジデンシー期間が終わって、参加者は帰国し、あるいは新たな旅に出ている。嗅覚は新たな唯一、脳に直接働きかけるという。お香に火をつけるときの場所、脳内の京都とつながっている。

(山田)

のんべえ大学詩歌学部 一京都巡回一



.....

恵文社一条寺店にて、レジデンシー参加者の俳人・佐藤文香さんが所属する「のんべえ大学詩歌学部」の選書フェアが開催されました。出入り口の傍にある机には、佐藤さんご友人の選書を中心に、お酒を連想させる歌集の名が書かれた特製ののぼりや、各々のユーモアにあふれる手書きのポップが取り付けられており、居酒屋を思わせる飾りが施されていました。

.....

そして10月15日には「のんべえ大学、秋の遠足」が催され、佐藤さんと友人5名が恵文社一条寺店に集い、その場で短冊を書きおろしました。書籍が置かれていない机や窓辺に短冊を置き、15分ほどで句を詠ってくれました。お店の前で店員さんに集合写真を撮ってもらった後、叡山電鉄で今出川へと移動し、出町柳商店街や鴨川の河川敷、下鴨神社を祈行します。歩きながらメモやスマホに句を書き留める歌人たちの姿があり、言葉で京都に新しい風景が加えられる瞬間となりました。(石田)

本

.....

屋さんとのつながりが多かった第2回京都文学レジデンシー。

丸善京都本店さんでは期間中、選書フェア「ここからはじめる世界文学」が開催されていました。今年度からの新しい試みということで、今年は実行委員による書籍&選書をメインとし、第一回の参加メンバーにも選書をおねがい。

SNSを片手に立ち寄ってくださった人や、用意したPOPにじっと目を向ける人の姿が見られ、新たな読者とのつながりも多く生まれたレジデンシーとなりました。開催期間のおよそ1ヶ月半で売れた書籍はなんと100冊以上。

多くの方に関心を寄せていただきましたこと、大変嬉しく思います。ありがとうございました。今後もどうか、より多くの読者を引き込み続けることができますように。

(杉本)

のんべえ大学に限らず
今年は飲兵衛な瞬間が
たくさんありました...



ルス・ヴィトロ

京都文学レジデンシーでの経験は、まるで夢から覚める直前の夢のようなものです。1ヶ月間、日本の美しさに浸り、その魅惑的な文化のニュアンスを余すところなく吸収できたのは光栄なことでした。この期間に経験したことが、これからの私の仕事の中で発芽し、この先何年もの間、思いもよらない形でインスピレーションのタペストリーを織りなしていくと信じています。京都は私の記憶の中で、もっとも美しい章として永遠に残るでしょう。



右から佐藤文香さん、ジョセフィン・ロウさん、ルス・ヴィトロさん、モード・ジョワレさん、カン・バンファさん

©Naoyuki Ogino

第2回京都文学レジデンシー 参加作家よりひとこと

モード・ジョワレ

はじめての日本、はじめてのハローキティラッピング電車での文学談義、はじめてのドミトリー、はじめて紫蘇を味わい色づいた舌、はじめてのキョウコ、ユウテン、エリナ、サエ、アヤカ、パンファ、二回目のジョセフィーヌ、はじめてのルス、はじめての横断歩道での鳥のさえずり音、はじめての鯉節工場を見下ろす窓、はじめてで最後になるであろう納豆、はじめての川に住む亀、はじめての能舞台、はじめての足袋、はじめての朝の三社詣り、はじめての奈良、大阪、姫路、神戸、はじめての日記形式の散文、はじめての『くいな橋物語』執筆への夢、はじめての美の都の光、はじめての文学レジデンシーの永遠なる濃密な感情——すべてはこれから翻訳されていくのだろう。

佐藤文香
紅葉前の静かな寺で秋の緑を
慈しみ、友と句会や歌会を重ね、
日の終わりに酒を飲んだ。日
常から切り離された京都での
〈超日常〉は、素描のように書
き取るだけで、詩のたしかな具
となつて現れた。
よく歩き、たまに走った。文
字で知っていた土地の名を、親
しい景色として受け取れた。京
で書き継がれてきた詩歌に、今
日の自作を書き足すことで、こ
の地の歴史やコミュニティに挨
拶することもできた気がする。
この3週間の奇跡を今後のの
日々に馴染ませて、豊かに書き
続けていきたい。

ジョセフィン・ロウ

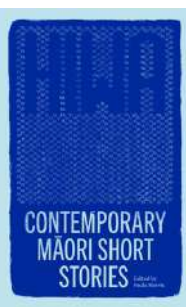
カン・バンファ
京都文学レジデンシー、万歳！……のひとこと
に尽きます。自国で仕事に追われている私
にとつては、改めて自分の文章と向き合える
貴重な時間でした。そして、あらゆる物事を
超越して、人とのご縁に感謝し、人が大好き
な自分を確かめることができました。寮の隣
にあった畑でしなびていく茄子のにおい、黄
色に茶色に朽ちてゆく葉々に見とれていた
午後。まだまだひよっこ私ですが、あのと
きとらえたかすかな「発酵」の兆しを体現し
ていきたいと思えます。

オーストラリア、サウス・ギップスランドの静かなビーチからこれを書いている。暑い霧のかかる十一月の金曜日、まだ夏ではないがすでにビーチと山火事の気候。物憂げな夢のような一日。そこから私の京都での一ヶ月が、鏡のように、夢のように揺らめいている。

今朝、私は吉田燕子の訳による森山恵の詩で「空蟬（うつせみ）」という言葉を知った。うつせみ。私の国にはこれにあたる言葉はない。あるべきだと思うけれど。私たちは単にセミの抜け殻、型、殻など、かつて人々が残像を実質的なもの、つまり、(私たち自身を含む) 目に見える世界のすべてが、無限に近い透明な層のひとつで構成されていると信じていたかのような言葉でそれらと呼ぶ。残像は、見るという単純な行為によってページのように引き裂かれ、捕獲され、保存され、どれだけ残像が積み重なろうと、まぶたの裏にきれいに収納される。

この日本語は、私が京都で過ごした時間、アイデアの交換と拡張、そして今この緯度についてさえもなお粘り強くしがみついている印象について表現したいことの、本質的な始まりのように思う。
(まとめ: 勝治)

▶エミリー・パリストレーリさんによる森見登美彦作『四畳半神話大系』の英訳 *The Tatami Galaxy* が2023年PENアメリカ度翻訳賞の最終候補作となりました。他にもゲーム「にほんの田舎ぐらし」ローカライゼーションやすずゆきさんの漫画『ふたり明日もそれなりに』英訳と活躍中。またレジデンシーのアドバイザーボードメンバーの藤野可織さんによる短編がアメリカの文芸誌 *Southern Review* に掲載されました。レジデンシーでは▶大前栗生さんとのコラボレーションが実現し、小説『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』の英訳版 *People Who Talk to Stuffed Animals Are Nice* の出版も6月に実現。本作は4月に映画版が公開され、10月にはDVD発売、配信も始まりました。▶ユベール・アントワヌさんは十冊目の本に当たる *L'oeuf de chèvre* 『山羊の卵』の原稿を仕上げ、京都の銭湯を舞台にした短編「 π の終わり」を発表。また、2015年の第一長編がペーパーバックで再版されました。



**第1回
参加作家
からの
お便り**

▶ポーラ・モリスさんはオークランド大学出版から現代マオリ作家の短編アンソロジー *Hiwa: Contemporary Māori Short Stories* を編集・出版し、翻訳者大作道子さんの協力ニュージーランド政府の助成を前提に現在日本での出版先を探しています。2024年1月には夫婦で京都を再訪。龍谷大学や立命館大学の授業でゲスト講師を務めました。レジデンシー中に第二長編『うなぎの思い出』を出版した▶アンナ・ツィマさんは、10月28日、国際交流基金主催・早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)共催の国際シンポジウム「世界とつながる日本文学～after murakami～」の柴田元幸さん司会の作家パネルディスカッションで、台湾の呉明益さん、レジデンシーアドバイザーボード一員の柴崎友香さん、韓国のチョン・イヒョンさん、アメリカのブライアン・ワシントンさんとともに、新世代作家にとっての日本文学について話をしました。▶アンナ・ツィマさん、ユベール・アントワヌさん、澤西祐典さんはヨーロッパ日本文学会が開催されたベルギーで再会。交流は続いていきます。(吉田)

KWR02 におきましては、たくさんの方より支援を頂き、開催が実現致しました。第一回からご協賛頂いている香老舗 松栄堂様、DMG 森精機株式会社様からは引き続き、ご支援を賜りました。また、今回は株式会社グランマーブル様からもご協賛を頂きました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。京都・滋賀にベースを置く企業様に、京都文学レジデンスーをご理解・ご支援いただけていることに、実行委員一同励みに思っています。

また、Arts Aid KYOTO（京都市）様およびベルギー王国フランス語共同政府国際交流振興庁様より助成を頂きました。京都市様ならびに一般社団法人 京都経済同友会様からは後援をいただいております。

くわえて、コングラント寄付サイト (<https://congrant.com/app/projects/3631/summary>) 等を通じて、下記の個人様・団体様からもご支援を賜りました。木下真穂様、神羽登様、古代豪族の会様、新井高子様、菅谷香苗様、カン・バンファ様、大作道子様、匿名（3名）。その他、朗読会イベントの参加者の皆様から、会場設置の寄付箱に総額 24,047 円のご寄付を頂きました。実行委員会を代表して、お礼申し上げます。頂いた資金・声援をしっかりと受け止め、プログラム内容を充実し、企業様・サポーター様からご指示いただける形を模索しながら、百年続く文学レジデンスーの運営に努めていきたいと思っております。今後ともご支援のほど、どうぞよろしくお願いたします。（澤西）

レジデンスーと翻訳

僕にとつてのレジデンスーは、翻訳との対面から始まった。英語圏以外の作家が多く応募してくれていて、ほとんどは自作の英語訳を付けて送ってくれているからだ（英語がない場合、その言語のエキスパートに読んでいただく）。その後、参加者が決まったら、いざ京都に集合してのオープンングイベントになる。そこでは英語のやりとりが中心になるため、登壇者のあいだ、登壇者と聴衆のあいだを日英通訳がつかなく。レジデンスーの最後を締めくくる朗読会は、各作家が作った原稿を担当者が日本語に翻訳し、さらに、当日に朗読される際には文字から音声への転換（これもまた一種の翻訳だろうか）を経験することになる。こうして、翻訳で始まったレジデンスーは、翻訳で終わった。こう書くときれいなのだが、ともすれば翻訳してもらえばいいから、翻訳がちな英語圏の書き手を、翻訳という作業にうまく巻き込んでいくにはどうすればいいのか……。と、そう思う答えが出ない問いを新幹線の上で書いていて、ふと顔を上げれば、車両前方の電光の課題、樹脂なら解決できるかも！（藤井）

【2023 年度公募について】

初回レジデンスーは招待制でしたが、2023 年度ははじめて公募で参加者を決定しました。公募にあたって実行委員会に課した課題は、世界のあらゆる言語に対応することです。セレクションの核となるサンプル作品については言語不問としました。2023 年 2 月に公募受付を開始、4 月 15 日に締切。ネットとアメリカの創作学会を中心に広報を行い、合計 59 名の応募がありました。実行委員会の依頼で組織した審査委員会が審査を担当し、審査員が読めない言語で書かれた応募作については、その言語の専門家に査読を依頼しました。結果、海外からロウさんとヴィトロさんの 2 名、国内から佐藤さん 1 名が 2023 年度の参加者と決定しました。また、ベルギーのフランス語外交機関 WBI (Wallonie-Bruxelles International) との共同公募により、ベルギーフランス語圏でも独自に公募を実施し、ジョワレさんの参加が決定しました。2023 年度は日本人作家の応募が海外からの応募に比べてきわめて少なく、次年度に向けての課題は、日本における公募の広報です。2024 年度も春に公募を実施しますが、締切は半月から 1 月程度早まる予定ですので、応募を検討されているみなさんは、京都文学レジデンスー公式ウェブサイトや X（ツイッター）をチェックしてください。

（吉田）

SNS も 随時更新中

Twitter @kyoto_writers [JP]
@kwr_eng [EN]
Instagram
@kyotowritersresidency
note @kyoto_wr

個人様・企業様からの
寄付が レジデンスー
の大切な資金源です。
寄付ページはこちら>>>



KYOTO
WRITERS
RESIDENCY

●京都文学レジデンスー実行委員会常任委員：吉田恭子／澤西祐典／藤井光／河田学／江南亜美子／宮迫憲彦
／森慎一郎／カルドネル佐枝／勝治真美／四元秀和 ●学生スタッフ：杉本はなな／山田絵里奈／石田航大

■主催：京都文学レジデンスー実行委員会 ■共催：立命館大学国際言語文化研究所／龍谷大学／京都芸術大学 ■協賛：香老舗 松栄堂／DMG 森精機株式会社／株式会社グランマーブル ■助成：Arts Aid KYOTO（京都市）／ベルギー王国フランス語共同政府国際交流振興庁 ■後援：京都市／一般社団法人 京都経済同友会 ■協力：株式会社丸善ジュンク堂／株式会社恵文社 ■共同プロデュース：MUZ ART PRODUCE／CAVABOOKS